

集詩體新刊月

琴緒心

集貳第

次目

戰友	佐々木信綱
花ふいさ	太田玉茗
殘雪	武島羽衣
結びし髪	湖處子
昔の日	大塚楠猪子
雲嶺飛泉	石橋曉夢
少女	與謝野鐵幹
革命の歌	流仙堂主人
仙堂漫吟	愚仙堂主人
光風霽月	大町桂月
くゝり緒	田山花袋
緩絃急調	宮崎羊兒
小流涓々	重松朋水
別離	魚松
唱歌	繁野天
俳句	正岡子規
雜綠數件、廣告十件	



明治卅年十月廿六日
遞信省認可

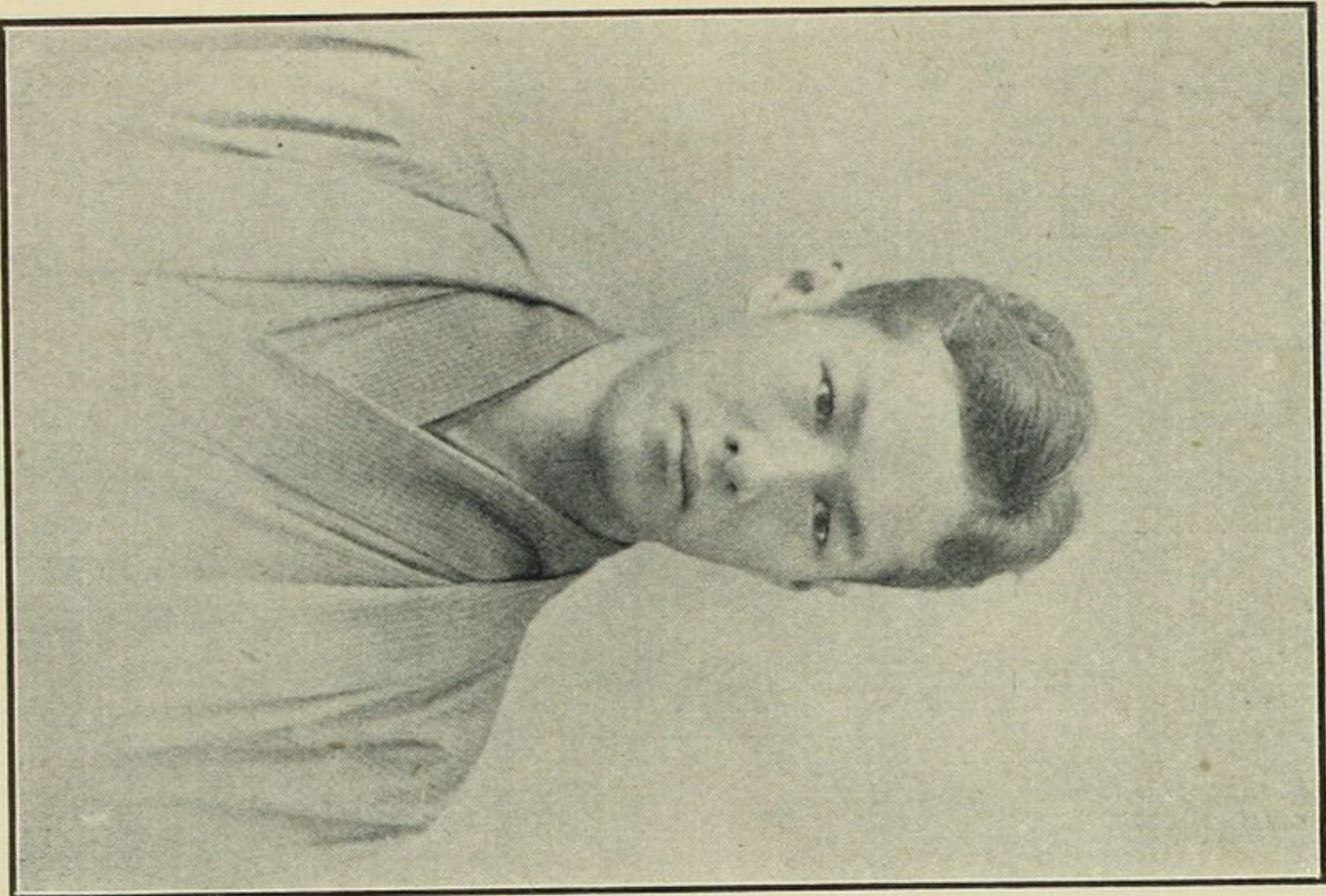
- 一、本誌は毎月一回十日に發行す。
- 二、定價は一部前金十二錢にして別に郵税を要せず。
- 三、廣告料は五號活字一行二十二字詰金拾錢、一頁五圓と定む。特別廣告は其都度御相談に及ぶべし。
- 四、替換は本郷郵便局にて取組の事。郵券代用は實際不便の地に限り五厘切手にて一割増なれば差支なし。
- 五、原稿は切は前月二十日と定む。
- 六、投書は半紙に楷書にて御認めらるべし。

社友規程

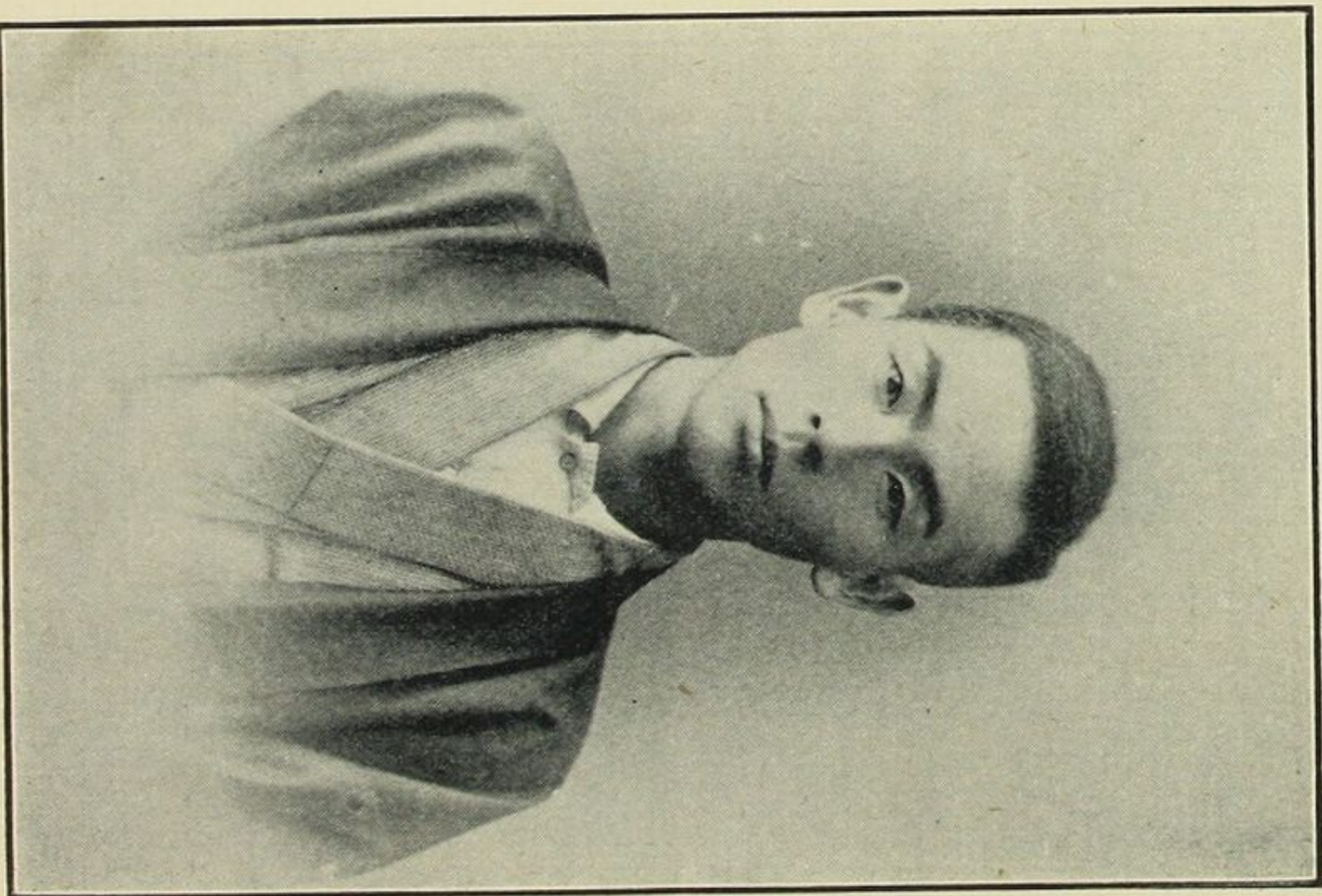
- 一、左の各項に相當する資格を有せらるゝ諸君は之を待つに本社の社友を以てす。
 - (い)心の緒琴六ヶ月分以上の前金拂込の諸君、
 - (ろ)心の緒琴六ヶ月分以上の購讀者五名以上を紹介したる諸君、
 - (は)本社の懸賞新体詩賞を得たる諸君、
- 二、社友の注文に係る本社發行の書籍は悉く定價の二割を減す。
- 三、社友の申込みに関する廣告は特別割引を爲すべし。



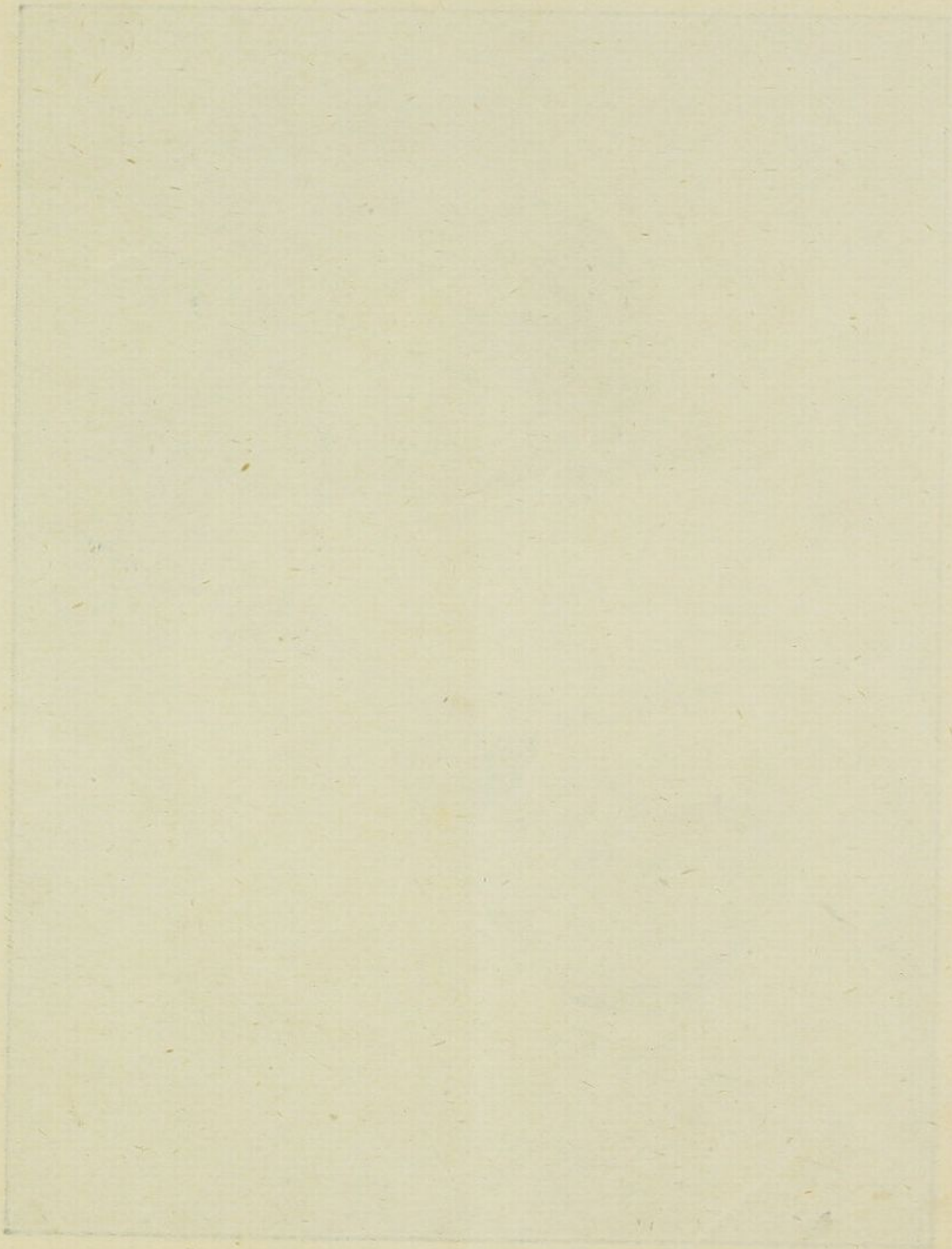
少 女 彈 琴

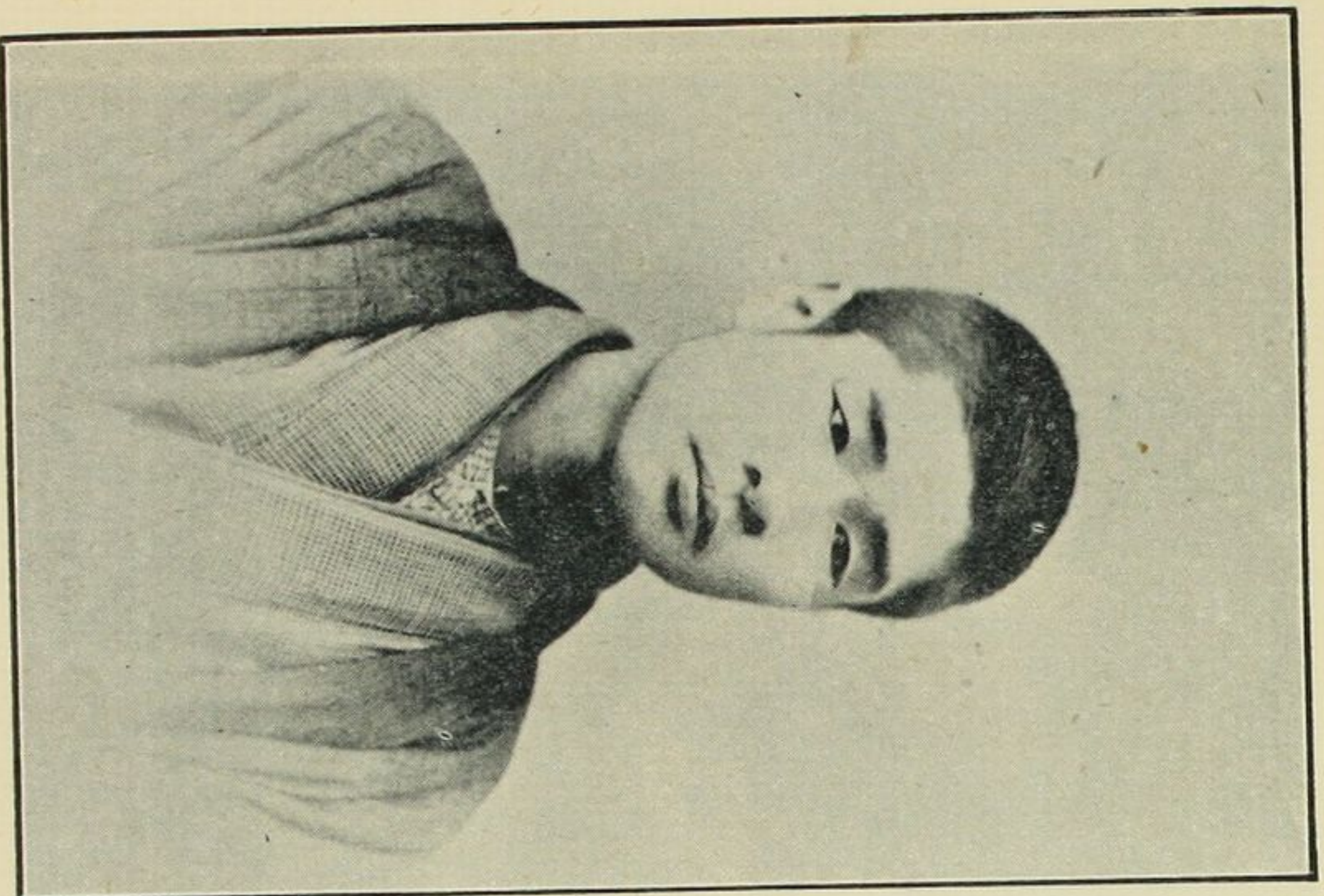


武島羽衣君

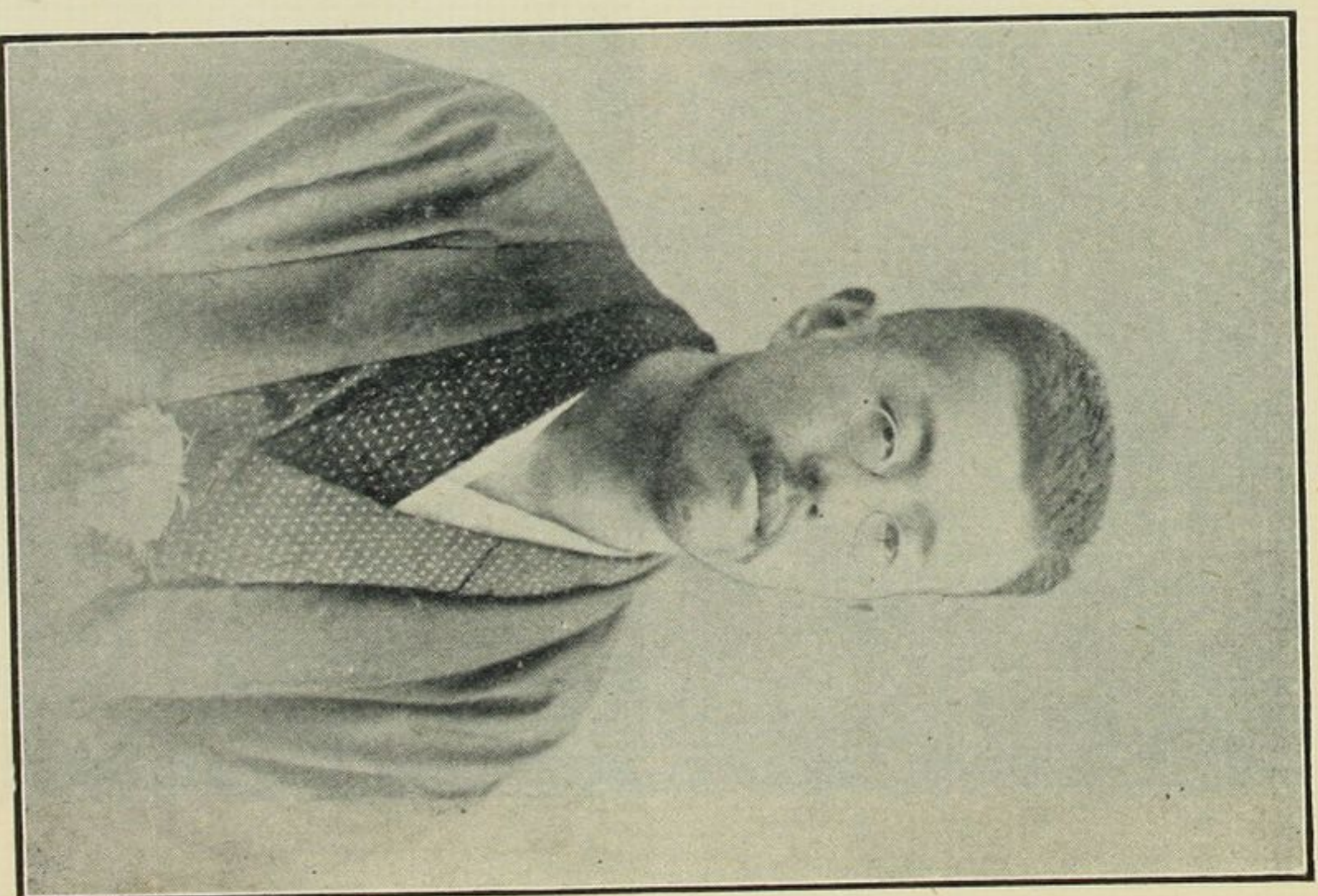


國木田哲夫君

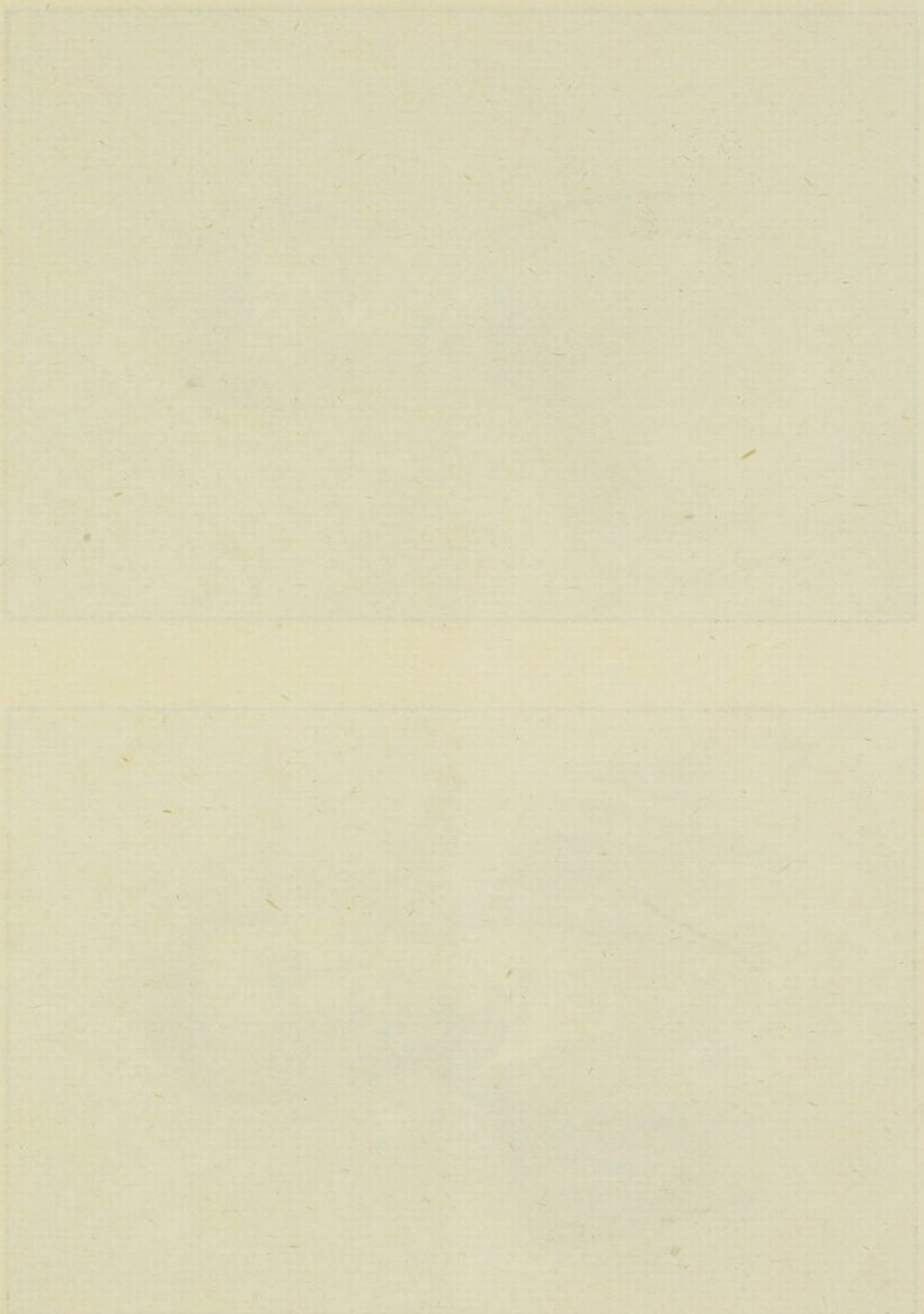




君若玉山太

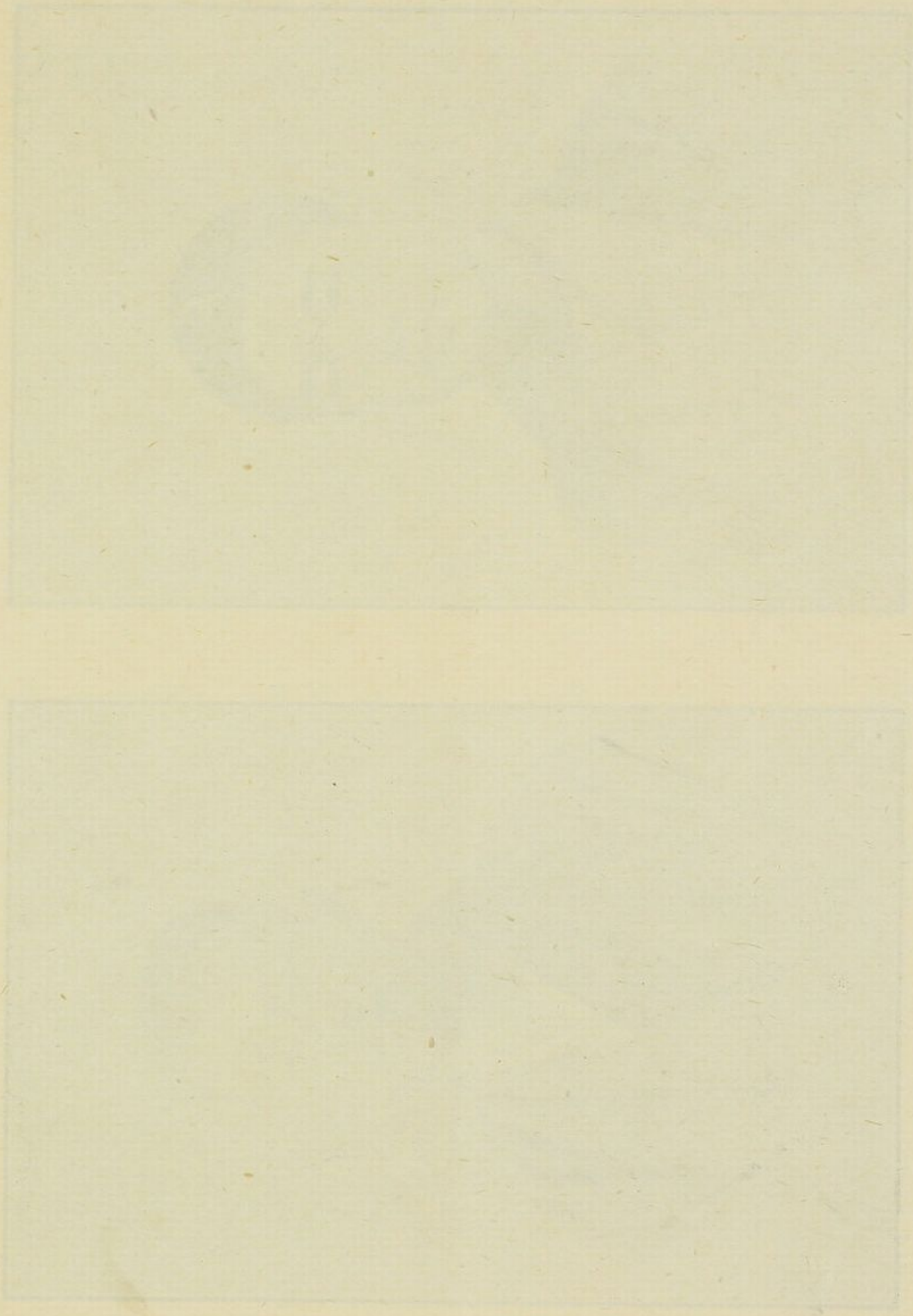


君綱信木々佐





買ひ来たにせられたる物品の名を忘れたる



月
刊
新
體
詩
集

心乃緒琴

第貳集

戰友

佐々木信綱

身を切るごとく吹しきる
満州おろしなにか有らむ
敵よりそゝぐ彈丸たまのあめ
なんでふ我はいとふべき
然はあれども身にせまる

やまひの敵を如何にせむ
心はさきにすゝめども
すゝみ難きを如何にせん
先鋒としてすゝむてふ
譽おひにし我中隊
つもるが上にふりつみて
道も田のもゝわかちなく
一足ごとに身をうづむ
雪ふみまけてはや三里
なにいさゝかの病をと
おもふとすれど進みえず
口惜しながらたへかねて

我はたふれぬ道の邊に

學びし家を同じくし

今はた同じ兵士なる

わが戦友は走せ寄りて

たふれし我をおこしたり

『如何にせし君、いかにせし』

我はこゑさへたてかねつ

『敵もなき地にたゞ一人

こゝえ死しても満足か

わが大君につくすべき

兵士のつとめは扱すむか

ゆくては近しす、め君
 すがりてす、めわが帯よ』
 氷る我手をそが帯に
 握らしめたり戦友は
 すがりつきつ、我も又
 かつく、つきぬ二里の道

雪の光にあかけれど
 早黄昏になりぬらん
 埋みのこせる里川の
 流一すぢへだてつ、
 かれし柳のひまゝに

見ゆるともしび三つ二つ
 敵のありかど見るまゝに
 いつか忘れつ身のやまひ
 しばし休らふほどもなく
 數百の敵はおそひ來ぬ
 つづきてはなつ銃の音
 馴にし身にもすすまじく
 落ちゝる玉はたばしりて
 あられよりげに亂るなり
 つもる白雪のり越えて
 すゝむが中に人よりも
 かの戦友はとくすゝむ

我もすゝみてゆくほどに
『無念』とさけぶ友の聲
見ればかたへに斃れたり
救ひおこせど彼ははや
すくはんとすれど今は早
あゝ雪中に死しつべき
我をたすけし戦友を
我はたすけんすべもなし
たまご頭部をつらぬきて
雪をまくらよ打ふせる
友はこの世の友ならず

花ふゞき

太田玉茗

自然

濁りはてたる世の中を
拾つるは何の難からむ
巷の塵を見るよりも
尙捨て易き世なりけり。

世はかく濁りはてたれど
富士の高根は雪しろし。

山より落つる谷川の

水のながれは底きよし。

『自然』は然り、世の中は

なぞかく濁りはてにけむ。

『自然』の如き世なりせば

世は懐かしき世ならむを。

あゝ世はいつまでも麗しき

『自然』と背き行くべきか。

『時』は叫べり、世の中を

『自然』に返せ、ふり返せ。

遊 君

憂き河竹に沈みたる

君は色さへあせにけり。

あはれや何を頼にて

ううれをとこを朝夕に

送り迎へて暮らすらむ。

幸あき君よ、空蟬の

うき世の人は君が身の

色こらめづれ、色なくば

ちまたの塵と一人だに

顧みるものなかるべし。

十

うたて憂世に生れ来て、

世の浮波に堪へかねて。

かよりかくよる和田つみの

藻よりはかなき君が身の

よるべや哀れいかならむ。

残 雪

武 島 羽 衣

今はかぎりぞ山の端よ、

今はかぎりぞ山の端よ。

こぞの師走の降りこほり、

木がらしさえしその日より、

汝があたゝけき胸のへに、

われをかくしゝ山の端よ。

今はかぎりぞ山がはよ。

十一

今はかぎりぞ山がはよ。

ねられぬ冬のよるしは、

わが枕べをすぎがてに、

しらべをかしきねにたて、

我をなぐさめし山がはよ。

立かへりくる初春に、

こちふく風もぬるみつ、

かすみそめたる谷の戸を、

かたりていづる鳥見れば、

わが世の中にあとたえて、

消えなん時はきたりけり。

あはれ山の端汝がみねの

松のみどりのきはみなく、

あはれ山がは汝が底の

さざれの石のかぎりなく、

心したしき友どちに、

千世もへんとは思へども、

春をへだてし柚川の

岩まのたるみしたゝりて、

みずゑがもとのわらびさへ、

はやもえいづるさま見れば、

わが世の中のあとたえて、

きえなん時はきたりけり。

十四

な嘲りそあさけりそ、

天ぎる風にきはひつゝ、

野山ともなくふりつみし

わがいにしへにひきかへて、

朝日てるまもまちがてる、

もろくもきゆる身のはてを。

げにやあしたに生れでゝ、

夕べをまたぬかげるふの

これ人みなのにちしも、

いづれか無盡イタニニチ永劫イの

大海原とつもるべき

しづくの數にあらざらん。

生ひさきこもる野や山の

千艸をわれは實になして、

すめ大神のかねてしも、

よさしたまひしつとめをば、

とけはてぬれば今はとて、

心やすくも消ゆるなり。

十五

抒情詩

詠天 湖處子

秋の夜中に窓あけて、

あふけは高し天の原。

きらめく星の影もちて、

いともたうとし神の國。

むすびし髪 (郷語の中)

註、若き男女の髪を抜きて縁を結び之を川に流して
成るを願ふの俗あれば

まなびの庭の撫子の、

昔むつみし君とわれ。

振分髪之二すぢを、

結ひて川になかしてき。

結ひし髪は今もなほ、

解けぬまゝありぬへし。

たえにし君とわが中の、

二たひあはむ時やある。

織女 (全前)

天の河原の織姫に、

たぐふる君を人や見む。

雪の腕もあらはにて、

箴さきうつ姿人や見む。

心かゝりなわが妹子、

二階の窓をさせよかし。

音の曰

大塚楠緒子

興來れども來れども

弾けども弾けど腕鈍く

狂はむ程になりし眼に

神の姿は見えにしか

幾年月をはげみけむ

我ヴィヲリヲの四つの緒の

み空にたつる音よ色よ

その時よりぞかはりける

心も入るゝ樂人の

血を沸きたゝせうち悶え

きかむとあせる神の聲

われどきゝける其時に

何處ともなき花の香を

尋ねて袖にしめしごと

道なき晴の奥ふかく

輝くま玉どりしごと

夢のさめたる心地にて

きのふに變るわか業は

妙なる極に入りしより

思ふがまゝに奏でけり

春の調とわかものに

歌ふ雲雀も鶯も

知らじやひとり我しらべ

この世の外のみなるを

震はしそむる指のさき

巧にかはる曲のあや

静まりはつる樂堂の

四面の壁に反るとき

幾百人のたましひは

夢のごとくに成りにけむ

怒り恨の息もなく

呼ひてとよむは我名のみ

譽の雲に乗りなから

桂の梢うちなひく

月の中にも入りしかど

われさへ夢路たどりけり

遠き旅寐のそこゝに

美しき山清き川

むかふ心を澄しては

奏つる腕を磨きけり

さすらふ所何處にも

あらむ限のちからもて

楽しきうたをうたひては

悲しき曲に泣かせけり

數多の戀をうちすてゝ

はしき少女の幾人は

われに命を捧げゝむ

かへり見もせぬわが爲に

思へはどほし昔の日

繰言すなるわれは今

ゆるやかにりし頬瘦せて

かへらぬ波はうちよせぬ

驕の酒に親しみて

榮花盡せし成れのはて

わう世の果はちかつきつ

甘き戀ちも老いにけり

荒みはてけりわか業は

屈みし指は延ひもせず

昔かなてし音の妙は

怪しきまてに濁りけり

崩れしついち草枯れて

秋暮れかたの夕風に

かなしきうたをうたふこと

鳶の葉ふるふまどのもと

古きヴァイオリンさし措きて

時雨るゝ雲をながめつゝ

すぎにし昔ときめきし

ヴァイオリンニストハ立てりけり

雲嶺飛泉

石橋曉

自適

情の道の荒さみなば、

寂しき野邊につゝたちて、

夕日の影を眺めつゝ、

七ひろ岩に身をばかへ、

山嵐、宵時雨、

叩たたつにまかせむ

吹くよ任せむ。

思ふまゝ

物ぐるはしきこの日頃

はやも碎けむわが胸の、

くしきおもひを誰か知る。

まさしき道をたどりつゝ、

ふみ迷はじとおもへばぞ、

かくもこゝろの湧き返る。

天をあふぎて叫けばむか、

地にひれ伏して泣きなむか、

あはれわが神きこしめせ。
たれもゑかくも物くるふ。
愚かの身とはなりにけむ。

よしや思ひはとげずとも、
せめてこゝろの通ひなば、
おのが望みはたりなむに。

あまつ使よくだり来て、
疾くもわが身を慰さめよ。
嬉したよりをもたらしつ。

鐘 聲

光 月 に、

晝のなやみは、

消え失せて、

夜も三更の

鐘の聲。

花の夢

世を果かなしどかこちつゝ、

なほ垂乳根のこひしさに、

秋の野に

寢て夢みけり

春の花

三十

少女

與謝野鐵幹

まき繪の硯なかならで、
蓋ふたをかしてと妹に、
乞はれてやがて與へしが、
かへさるなりぬ其儘に。

蓋はと問へば蓋は猶、
貸して給べよとうつむけり、
母のかたみの硯箱、
そこなはれなば如何にせむ。

或日ひそかに渠が居間、
のぞきて見れば眞白なる、
片頬を見せてすやノノと、
春の晝寢の罪なさよ。

蓋にこみごと赤白の、
花をむしつて積上げて、

三十一

花の底にはひとひらの、
母の寫眞を埋みたる。

富士よ富士よ

流星兒 (寄)

さびや歌はむ聲はり上げて革命の歌
富士の高嶺よ何時までかまどろむ
黄金の力に朽ちゆく民を如何にせむ
理想は亡び人は利に走る
清歌高明の士何處にかある
宗教の力今遂に如何

あゝ富士よ富士よ、
氣高き爾が姿仰ぐとも
神なき斯民を如何にせむ
時は來れり、爾が憤怒の時
舉げよ天の烽火
降りそゞげ烈火の雨
あゝ富士よ富士よ、何時までか忍ぶ
千秋萬古の白雪も何かせむ
節義何處にかある
信仰何處にかある
あゝ時は來れり、爾が震怒の時
舉げよ天の烽火

千電百雷、地震ふの時
黒烟猛火、天を焦かすの時
われ起て叫ばむ革命の歌

仙堂漫吟

愚仙堂主人

折にふれたる

君もあはれと思ひなば、

またどその名をいふ勿れ。

きけばなまなか忍ばれて、

涙の種となるものを。

失戀詩

熱きなさけぞ湧きかへる。

かくも奇しくなるものか、

ひとたび戀の身にしめば。

愚^おぞくも我はなりにけり。

あゝ我戀よ、望み無き。

あゝ望みなき、我戀よ。

我は望まん。いつまでも、

望みなき爾がおもかげを。

笑ひはするな吾妹子よ、

かゝる切なるまごころを。

誰ゆゑかくも狂ひけん。

愚かの身とはなりにけむ。

門の柳

そよどの風の音すれば、

若しやそれかと疑はれ、

あやぶみながら出て見れば、

門の柳の影寂し。

戀

戀ありてこそ世の中は

樂しきものとしりたるに

世の人々のなよゆえに

戀する人を笑ふらむ

榮と名をば欲しとてや

戀をもすてゝいたづらに

世に媚びるこそうたてけれ

樂しき戀をものゝしりて

二人が中にこひあらば

苦しきこといあらざらむ

富のあらずも名のなくも

女のなくもこひあらば

夕暮

富士の高嶺の雲晴れぬ。

窓吹く風のいと清し。

み空に舞ふや友鶴の、

たのしこゝろい誰が戀ぞ。

失戀の、鬼去り行きぬ、

望みの泉わきかへる。

吾のたのしくなりにけり。

妹もたのしくなりにけむ。

空を眺めてわがこゝろ、

いとも楽しく歌ふなり。

蒼然として日の暮ぬ。

我の夕の人ならず。

光風霽月

大町桂月

春の夜

たゞ手をとりて、しみぐと

かたみに顔を見合せて、

言はじとすれど、世のつらさ。

泣かじとすれど、身のゆくへ。

泣いてわかれむ、きぬぐは、

山とやならむ、野とやなる。

今宵ひとよの命には、

笑へ、浮世のさびしきに。

女の胸

百合を折らむとたちよれば、

ゆりのもとには、蛇すめり。

にはふ女のやわ胸に、

つらや、つるぎを、かくすめり。

見よや、情もふかくさの

少將は雪にうもれけり。

見よやちぎりし橋のもと、

尾生は水におぼれけり。

女ごゝろのまことなき。

かりの契りのはかなさは、

宵にはのめくいなづまの

有るかと思れば消ゆるあり。

くゝり染

田山花袋

昨日

ひろき野原にきえてゆく

秋の日かげをつくぐぐと

われたゞ一人見てをれば

何とはなしに悲しくて

涙ぞおつるそでの上に

うつし繪

ある春の夜の事なりき
あやしき心にさそはれて
行くとはなしに君かやどの
垣根の外にわれ行きぬ

庭には櫻の花ありて
今をさかりに咲きみたれ
空には月のかげありて
いはろくに打ちかすむ

ゆめにも似たる春の夜の
二の月花につまれし
室の中にてきみはそも
何をか爲してゐますらん
したひ寄りたるわび人の
ありとも知らず君はしも
文を讀みてやゐますらん
衣をや縫ひてゐますらん
誘へる風もあらくなくに
花はかすかにかをるなり

こひしき君のうつり香の
さなからにはふ心地して
されどまことに君はしも
何を爲してかゝるたまくる
久しく立ちて見れあれど
物音だにもせざりけり

月はいつしかとなりなる
椎のこずゑをはなれ来て
今しも庭の花かげを
君かまどへとうつしたり

あはれその時わがこゝろ
如何にうれしくありたるか
室むろの中にて人の立つ
氣勢けいせいしつると思ひしに

君がすがたはうつし繪の
それにもまして美しく
うつりにけりなこの窓に
花になりさるこの窓に

緩絃急調

宮崎羊兒

露

茜にはほふ旗雲の
 その紅の色に染み
 草の葉末に登るとき
 それ杯にくみとりて
 まだ戀知らぬ少女子に
 さゝげまほしき思あり

まだ夢深き夜明空の
 空の緑を湛へつゝ
 匂もたかき花の葩に
 なれ人知れず浮ふとき
 われ紫の裳の裾に
 うけて濡れたき思あり

美しきかな明星の
 清きすみかを尋ねつゝ
 なが懐にやとる時
 潔きかな夕月の
 天の彩雲わけ出でゝ

あゝなか胸に下るとき

嬉しからずや蝶々の

その力なき嘆息たみいきの

アゝなが顔にかゝる時

楽しからずや身を焦す

螢の熱き唇の

あゝなが面に觸る時

實に情ある天津女の

戀の涙ぞ人の世に

落ちて夜毎の白露と

清きなが身を讃たたへまし

宵星

春は眉曳く遠山の

霞の間よりほのめきつ

薄紫のすり衣

うら恥かしき風情あり

秋は思を大空に

さながら寫す紅の

雲の焰につゝまれの

見る眼眩ゆき姿かな

あゝ宵星よ美しき

ながまなざしの匂ふ時
胸に血潮の沸きかへり
春の命を覺るりな
あゝ宵星よ紅の
なか面ざしのある時
寂しき野邊に呻吟さまよひつ
失戀詩人血にぞ泣く

人待門の夕まぐれ
覺東なくも汝が影を
雲の絶間に一目見て
思はず歌ふ一ふしの

歌の心を誰か知る

稻妻

いかづちあめ
雷雨の小夜枕
闇に閃めく稻妻の
光に一目見つるかな
優しき妹か寢姿を

逢瀬

見かはず顔は烏羽玉の
闇にかくれて見えねども
君に會ひたる嬉しさを

何にたどへて歌ふべき
言葉はなくてとりかはし
かたみにしむる手の上に
熱き涙の落つるかな

川流涓々

重松明水

旅

誰か舟路のゆふぐれに
ひとり眺むる旅の身の
悲しからざる者やある

たゞ一筋にふる郷を
忍ぶといふにあらね共

暮行く汐路ながめては
誰か悲しく思はざる。

歸郷

大海原のゆきふまぐれ
島山淡くかすみつゝ
漕ぎ歸るらんあま小舟
行方もわかずなりにけり。
眺もはるかに吹きて去る
潮の風の膚寒く
船ばたをかむ波の音

旅人のむねよ響くかな

あはれ汐風いさぎよし
あはれ波の音心地よし
ながく打たれて譯もなく
湧かんとすらんわが涙

都に春の夢さめて
故郷遠くかへり行
あきらめはてしうつし世に
忍ぶる方もなかる身の

別離

魚ぬの

稻葉を渡る秋風は

夕の色を吹きよせぬ

はるけき寺の鐘の音は

急げる雲をとどめたり、

東の空のむら山は

夕日の影を脊にうけて

麓の家より立ちのぼる

烟の中に眠るなり、

西のみ空にまばゆくも

たなびき渡る夕やけに

明日の日和をたのみつゝ

圃の人より歸るなり、

この静かなる故郷に

われは老ひむとおもひしよ

運命かみの鞭ははしなくも

われを都よからむとす、

東すべしと旅衣

とゝのえて立つけふよりは
山越えてまた海行きて
夜なく、仰く月を友、

五年六年都なる

隅田の流に舟うけつ

蟬の小川に釣をしつ

歸り來らむ時まで

夕の景色よなつかしき

父母を汝が懐るに

けふより後をあづけなむ

いとも静かにみどりてよ、

唱歌

(明治廿九年、東京専門學校運動會
のために試みたる駄作)

繁野天來

其一

樂し、今年も春と、

やましく霞みつゝ、

いつしが、森かげに、

井ナスの足の跡

月もすみだの里に、

年々、花咲きて、

うぐひす、来よくと、

年々、人を待つ。

いざや、井ナスと共に、

早稻田を、立出で、

去年みし、花かげに、

こぞみし、春をみむ。

其二

起てよ、春春風たちて、

拂へよ、朝かすみ。

井ナスの花、笠に

濺ぐは、花の雪。

大路、小路の露に、

征衣の、袖かるし、

建脚、飛ぶところ、

かくこそ、風を踏め。

いそげ、彼方の雲は、

隅田の花さくら、

うぐひす、来よと啼く

隅田の八重さくら。

其三

いざや并ナスと共に、

征衣を、くつろげて、

去年みし、花かげに、

こぞみし、春をみむ。

「ついにし九事」

小林力雄

「ついにし九事」と、一と筋に

幼き乙女詫ふれども、

さりとも肯かぬ母親は

繼まの間にやあるならむ

憎しと見れば、其のおもわ、

「虫も殺さぬ」謎の

はり言を今憂姿やまぢかた。

さて、由縁ゆゑんの果ての身か。

六十六

「ついにした事もいく度ぞ。

ほんに、強情つねなのこの子や」と

泣く襟えりに落たりな、

つめたき雫斬しづきばかり。

酸漿

朧月夜の果敢無くも、

君と悟らで過ぐべきを。

耳みみに囁くは、づきの、

音より知れたる嬉しさよ、

我われに聞かせむためにとて、

今しも、君は鳴らせしか。

されど、わりなく、他人たにひとの、

床とこかしと聞かばいかにせむ。

君よ。さばかりやさしくば、

つたなくも吹け。我は、たい、

君なることの嬉しきに、

聞きわく、ひまもあらぬなり。

日傘

六十七

たわやめの

ほこるおもわの見せ、たさを、
つゝむ蝙蝠傘色にいで、
行き交ふ我の夏あつし。
眞紅の扱帯日は射して、
燃ゆる思のやどるかな。

夕しづかよ

夕しづかに、岡の邊を、
たどるも嬉し、二人して。
思千ぐさのわが袖を
君へと吹けるさよ風や。

野末隈どる杉木立、

影は入日のあと清し、
眺望も涼し。初秋の、
寄せて、さわがぬ稻の波。

柳の下づ枝落葉して、

さらりと垂るゝ洗ひ髪。
君ならなくに、誰をかも
照らす、か今宵、月白し。

君が姿を、いざよひの

光めでたき月影に。

あかすも獨り眺むれば、

幸のみ見ゆるわが世かな。

俳句

正岡子規

墓原につゞくや寺の蕎麥畠
稻掛けて梢短き並木かな
白帆見ゆや黍の後ろの隅田川
茸狩や山淺くいくちばかりなり

饅頭に腹がふくれて雁の聲
鶉鳴いて提灯草に隠れ行く
蛭瘦せぬ秋の野川の水清み
刈田から何驚いて鳩四五羽

送別

草鞋はいて木曾路の露につまづくな

旅より歸朝て

行く秋や庵の菊見る五六日

トッゲンブルヒ騎武者

シルレル原作

水月生譯

妾を妹といつくしむ
何ぞか望まんあだ情
胸の思をよそめには
君が眼のためなみだ
思は沈み耳は澄み

君に捧げん此こゝろ
さるは憂の種にころ
静かに君を送らまし
とちて語らぬ君が口

胸はあふれてつゝと起ち

小女をひしと抱き占め
のせて徐行ふ都下の方
見指す處はエルサレム

盡きぬ名残を駒の脊に
そは「シュワイツ」に屯せし
輝く胸の十字牌

大丈夫がうちふるふ
草木となびく敵軍の
別けて轟く彼が名は
されど癒すに術なきり

腕に成せる大功勳
中にゆらめく冑の纓を
異教徒ムイゼンさゝて肝寒し
彼が沈みし胸の中

かくても耐へぬ一年の
駒追ふ勇氣も失せにしが
「ヨッペ」の濱に真帆上げつ

耐へぬ思に今はとて
味方の軍勢振りすて、
追風に朶む舟一つ

戀しき空へどこがれ行く

そこに小女が住めるなる

小女が住める城の下

門の戸開く武者一騎

君か尋ぬる其人は

世を遁れたる墨染を

神に盟ひを掛卷も

ほぎ祝ひしは昨日なり

門を開きつ門衛の

霹靂一聲胸を打つ。

代々住み馴れて其城も

今日を限りと振すてん

劔も今は用はなし

駒も此身に何かせん

「トッゲンピヒ」の城郭を

人目忍びて下り行く

其落人の扮装は

只身を包む毛の衣

晝さへ暗き菩提樹の

森の中よりはの見える

高く聳ゆる尼寺の

向ひに結ぶ庵あり

東雲しのめこがす旭日より

忍ぶ思は夕日迄の

のどけき望みを顔かほばなに

静けく座する人ありき。

片時眼を離さすよ

打目守るなり尼寺を

かしこの窓の開く迄

こひしき人の窓の方

思ふ少女のいづるまで

貴き影の見ゆるまで

谷の景色を見下して

温顔天女のごとくにて

心穩かにうち伏して

旭日の夢を破るとき

かくて過しぬ幾日を

浮世のふきも何處へやら

悪しき人の見ゆるまで

谷の景色を見下して

かくても座せしある朝あした

静けき顔の青白く

いと楽しげに睡るなり

いと心持よく覺めむなり

かくてかそへぬ幾年も

窓のひらくを頼みにて

貴き影のいづるまで

温顔天女の如くなり

生ける氣もなき屍むくろにて

かくても向けり彼の窓を (完)

星

瀧澤久馬雄

夢けふり行くしのゝめの

鳥の鳴音に送られつ

彼の曉星を知るや君

うす紅に匂ふとき

くるゝ彼方に流れ行く

紫雲のうする時

雲のあなたに消えてゆく

夕やけ雲のかげ落ちて

さゝめく子等にうたはれつ

彼の明星を知るや君

消えては何を思ふらん

とびては誰を慕ふらん

此世をいぬる人々は
かゝやくとかやあはれ君

里川よ

すみて甲斐ある世ならねど
あはれ小川よ里川よ

ちりにけかれし世にあれど
天津みそらに住給ふ

雨の夜

なれのみひとり清くあれ
彼の明星も宿るなれ

(心の緒琴第一集
所載川の水を讀みて)

星とどなりて大空に

垣根のま萩花ちりて
ことに君こそ戀しけれ
君か宿りと音つれて
其夜はあはれ雨なりし

白山紫水

折にふれて

浮世の風の吹き荒れて
わが身のほどり打寄せて
たのみはするな世の中を
雲間がくれにいと高く

林星花

鹿の音遠き雨の夜は
あすは都に立給ふ
つきぬ名残を悲しみし

にこれる波の絶間なく
きよき心を亂すなり
たよりはするな世の人を
きらめく星のかげを見よ

池は静かに水すみぬ
松にふきたつ夜嵐に

悲しき別れ

さらば別れん吾妹子よ
つきぬ思ひはありながら
折りてさゝぐる一枝に

わが胸

戀はいかなるものぞとて
なにと答へんわが胸を
學びの道はひろくとも

梢にかゝる月白し
わが赤心は通ふなり

櫻の蔭をゆく水の
さまがよ其れと語りかね
わが赤心を吸めよかし

人にとはるゝとあらば
なにと語らんわがこゝろ
思想おもひはいかに高くとも

戀の光りの照さずば

漫吟

にぞらばにこれ
いかに浮世はにぞるとも
いかでか絶えんわが生命いのち
清けく高さ久方の
わがまことあり光りあり

世には眞理まことのなきものを

あれなば荒れよ
いかに悪魔はあるゝとも
いかでか消えんわが希望のぞみ
天つみ神のすみかには

紙 鷲

本多波也登

風無き時は地に隨る。

浮世の中の揚り風。

甲斐なき絲を命ぞと、

すがり居ることあはれなれ。

雜 錄

若菜集を讀みて

桂濱月下漁郎

十四五年以前、新体詩抄の世に出でし頃は、世は未だ新体詩を文學の一種として認めざりき。然るに、この二三年以來、新体詩頓に勃興し、忽ち文壇に重きをなすに至りぬ。知らず、これ誰の力ぞや。

かく新体詩の勃興せるは、或は時勢の然らしむ所なるべけれど、思ふに、藤村等の如き詩才が専心、此に従事して、世の詩壇を鼓吹せるもの、與つて力なしとせんや。今の世所謂詩人は少しとせず、而して藤村の如きは、將來望めるもの、一人なるべし。若菜集一部、藤村が去年の冬より、今年の春へかけ

て作れるもの、五十餘編を收む、先づ之を藤村の處女作と云ふも可也。而して、既に一世に超絶せる特長の處ありて存す、この詩人の將來こそたのもしけれ。

藤村の、優にやさしき詩人也。その詞もやさしく、想もやさし。而して、咏ずる所は多く抒情詩にして、且つ戀愛詩なり。藤村は、抒情詩人也。而かも能く抒情詩の秘訣を知れるもの、如し。抒情詩の秘訣とは何んぞや。バカニス曰く、抒情詩は晦濛ならざるべからずと。抒情詩人たる者は、先づ之を解せざるべからず。彼の真情を歌はむとして平語に陥り、議論を寓せむとして勃率となるは、ふれ詩才なきもの也。言ひつくせば、餘韻なし。妙は、解不解の間に在り。且つや切情の、言語の能く盡し得る所に非ず。抒情詩の至れるものは、自から晦濛ならざるを得ず。抒情詩の秘訣とい、即ち是也。世の抒情詩を作るもの、勃率ならずんば、即ち平語、淺く、意も淺く、語盡きて意

も盡き、散文に類して、詩趣なく、餘韻なきもの多し。われ、藤村の詩を見るに、未だ晦濛の妙を得ずと雖も、言盡きて意盡きず。勃率の弊なく、平語の弊なく、言外の妙ありて篇々みな詩趣あるを覺ゆ。おえふ、おきぬ、おつた、明星、おもめ、初戀、深林の逍遙など、以て之を証すべし。

優にやさしきは、藤村の長所にして、從て崇高、雄渾など、その短所なり。之を譬ふれば、亭々たる松柏にあらず、爛熳として相連れる櫻花にもあらずして、可愛らしげに野に咲ける草花也。又之を譬ふれば、山の屹立せる姿もなく、大海の淼漫する様もなくして涓々として、月を碎く清溪の水也。詞に鏗憂の響なけれど一種優雅のしらべあり。天矯激楚の意氣なけれども、情切にして熱し、涙痕の見認むべきものなきに非ず。たとへば、おくめの篇に「しりたまのすや我戀は、雄々しき君の手にふれて、わが口紅をその口よ、あはれ移さでやむべしや」などいふ如き、切情言外にあふれ、語氣人を刺す

ものあり。されど、「戀は吾身の社にて、君は社の神なれば、君の祭壇の上ならで、なに、命をさげまし」といふに至りては、纖巧に過ぎて、詩趣索然たり。藤村の詩、他にもかゝる弊多し、今一々その例を示さず。なほ四の袖傘の内など、情の切にして、調の整へるを見る。哀歌十三節の中に、「悲し心哉や」といへる藤村特用の感歎調を、幾んど句の始め毎に用ゐたるは、反て、悲しからず。懐古の篇も拙し、その結句に「都のかたを眺むれば、あゝく熱き涙かな」などあるは、語氣うきで、詩趣乏しからずや。

天馬は、最長の篇、藤村の力をつくせる所なるべし。その牡馬の條には、他の藤村の詩、に似ず多少雄壯の語氣もあれど、天の牡馬を咏せるものとして、今一層崇高鏗憂の語調あるを要す。時に生硬の熟語あり、文章支離して語を成さず、法に外れたるものあり、且つ千篇一律の看ありて、語法に變化なく、規矩整齊の觀に乏しきは、蓋し藤村の老成を待つて改むべきもの乎。

問答のうたは、いづれ餘り面白からず、長篇より、短篇がよく、このひて、詩趣多きも、抒情詩としては、自から然らざるを得ざる所あるべし。抒情詩は、饒舌を嫌ふ、ゲーテ、ハイネの抒情詩に短篇多きも、之が爲め也。されど、また、天馬、深林の逍遙などの如きは、長けれども、ゆるみなし、亦以て藤村が才の小ならざるを知るべし。

要するに、藤村の詩は、篇々みな多少は詩趣あり。戀に泣き、物のあはれに泣き、到る處、藤村の俤見ゆて、何となく、やさしく、なつかしき心地す。藤村は一種の抒情詩人として、幾んど成功の途に上れるものと云ふべし、今の世、叙事詩に長せるものは、他ふそ人あるべけれど、抒情詩に在て、われ最も藤村の清新を愛す。僅々半年の間、已に五十餘首あり、その思想豊富にして、手腕の矯捷なると、以て推すべし。たのもしきは、藤村の將來也。

唯變化に乏しく、優婉にのみ偏せるに、これ藤村が詩人として、未だ全く詩人として大ならざる所也。願くは、益其長所を發揮すると共に、之の短所をも顧みて、勵精以て詩の爲につくせよ。殊に多とすべきは、新體詩にのみ專心熱中せるに在り、天來、天遊など、小説に趨れるに、藤村と羽衣とは、韻文にのみ専らにす、亦以て新體詩の爲めに重をなす足らん乎。

出てよ革命の詩

出てよ革命の詩人、歌へ革命の詩、社會は腐敗せり、人心は墮落せり、人世情淚臆を濕す、嗚呼涙ある詩人よ血ある詩人よ起てよ、起て腐敗せる社會墮落せる人間に向て滿腔の熱血を灑げ、あゝ社會は利に酔ひ黄金の向ふ所敵なからんとす、詩出でよ革命の詩人呼べ革命の詩、

録 摘

◎中村秋香氏 曰く三十一字の短歌は舊來の思想詞藻のまゝにて向後あるも無きか如く無用の文字となりて文學などいふものゝ部類には容れられざらんとす。さりとして三十一字の躰は歌の形式に於て必要なる所あるが故に自然に存せざるべからず、されば向後短歌の運命は其思想と言辭との進歩變遷を見ざるべからず、新思想の新言辭をもて歌はれざるべからざるに、東西何れの史に徴しても明かなる事にて、向後の時勢は歌人をして舊思想に安んせしめざるが故に、歌もまた必ず新思想に適應なる詞句をもて咏ト出さるべきものなり、予はあくまでも此後の歌詞は自然に人爲に新文物を詠出して時勢を化移しゆくものなるを信ず、唯其運用の功否は作者の伎倆如何に存するのみ。歌どしいへは古き事をのみ詠する如く思ふ一種の慣習を破らむことは今日の急務なり。(國民新聞)

◎今の新進たるもの如何に敏腕を有するも、如何に佳作をものするも、老朽たりとも先進の名あるもの、門に入り、若しくはその紹介を得、或はその校閲を経るにあらざれば、文學界に進入するを得ざりとか。若し果して之が事實ならば、新進作家の不自由は扱て置き、随分馬鹿げたる極といふ可し。

寄語す、想あり、血あり、腕あり、氣慨ある新進の薄命兒、何ぞ歩を轉じて他の自主自由の天地を求めざる、自主自由の天地とは何ぞや、新進詩の新世界是なり。新進詩には、人も知れる如く、尙ほ一定したる詩形すらあるなし。

何ぞ師あらんや。また弟子あらんや。況んや門閥をや。たゞ夫れ新進詩界は未だ開墾せざる茫漠千里の曠野なるを以て、之を開きて沃土とし、無限の收穫を得ると否とは、一に開者の勉勵次第にあり。實に新進詩界は常にその門

を開きて、卿等を歓迎せんとす。此門に入りて一旗幟を立つるを亦快ならずや。新進詩界は實に新進文學者の尤も有望なる世界なり。(大日本)

社告

九十二

本社は大に將來の事業を擴張せんとするに當り從來の處にて不便少からざりしを以て左記の處へ移轉仕候。爲に事務の繁忙を來たし。本號は充分改善の實を擧ぐる事能はざりしは誠に遺憾の至に候へ共、今日の場合亦如何とも難致候。更に次號より號を逐ふて本誌の面目をして一層發輝せしむる事を勉め、江湖諸君の愛顧に反かざるものと可致候。以上

下谷區茅町二丁目壹番地

三友社

新體詩、和歌、俳句募集 (本月廿日〆切)

●文學同志會出版書籍目錄●

人間學

定價 二十錢
郵稅 四錢

世には百科の學藝に長するもの多し然し人間學を修めたるもの少し凡ての學藝は人間の爲に設けたるものなれば人間の成立目的事情及び如何にして完全なる人間の眞價を保つべきかを研究しつゝ脩めざるへからず若し然らざれば己の習ひ得たる學科の爲に人間は擡にせらるゝに至る本書は此社會の凹所を徹り補んが爲に出でたり

美妙

定價 二十錢
郵稅 二錢

春の花夏は螢秋の虫の聲冬の雪是等を始めしとして人生の美貌鳥獸の艶ある事及び音樂より來る美如何に人生に快樂を與ふる賜なるか本書を繙くときは幽谷の鱒魚亦飛立の妙美あり

文學の調和

定價 二十五錢
郵稅 四錢

國異れば各々異りたる所の事情あり異なる事情より各々殊別の文學を生じ是れ一般の通理なり然し深く探究し來れば皆一に歸するものなり本書は各國文學の異なる處を示し長短の意を示し如何に去て其調和均一の點に達すべきかを詳論せり

人生の目的

定價 二十五錢
郵税 四錢

人心の異なるは尙ほ面の異なるが如し故に人は皆異なる處の目的を有す本書は人生各種の目的を示し残る處なし其目錄は左の如し
●第一章緒論 ●第二章飲食主義 ●第三章勤勞主義 ●第四章競爭主義 ●第五章知識主義 ●第六章良心主義 ●第七章忠孝主義 ●第八章幸福主義 ●第九章自愛主義 ●第十章他愛主義 ●第十一章兼愛主義 ●第十二章保存主義 ●第十三章知識主義 ●第十四章勤勞主義 ●第十五章競爭主義 ●第十六章知識主義 ●第十七章良心主義 ●第十八章忠孝主義 ●第十九章自愛主義 ●第二十章愛他主義 ●第二十一章兼愛主義 ●第二十二章保存主義 ●第二十三章結論

女子職業案内

定價 十五錢
郵税 二錢

女子よして職業を知らんとせば本書に就きて學ぶべし其手續と方法の皆此書に載せてあり

婦人實務錄

定價 十六錢
郵税 二錢

此書は議論にあらず婦人の實際毎日心得ざるを得ざる教訓心得方針を信切に説き苟も婦人として心得ざるを得ざる案内書也

勤學日記

定價 八錢
郵税 二錢

立身の目的あるもの必ず一讀を要す本書の記事の荷も青年の師表とすべし男女の實話を語り男は女を助け女は男を助け大物となりたる道中記を載す非常の苦痛非常の快樂言語の外にあり皆黙して其節義を守りたるに至りては一讀のとき之を批評せよ

家の寶前編

定價 十五錢
郵税 二錢

本書は文學會の方針とする家制部發表の書にして各専門大家の家制意見及び家に起る萬般の事業方法を教へ其項目も五百有餘あり廿八年初版を起し今十八版を重ね部數五万八千部を出せる書なり手に取りて其價額を知れ

家の寶後編

定價 二十錢
郵税 二錢

本書は前書の後編にして前編を讀むものは此書も讀まざるべからず後篇は愈々其奧義を示す家制の妙味ある處に論及せり

實業の實

定價 二十錢
郵税 二錢

此書は家の實の兄弟となり得べき書にして家の實は家の内の事に係り實業の實は家の外の事に係る恰も車の兩輪の如し書を好むもの、好同伴たり

發兌元

東京神田錦町一丁目八番地

文學同志會

見よ

大改良

見よ

四

百花園

發行所

東京神田須田町 電話本局二六九

金蘭社

第二百四號(十一月三日) 發兌(定價一冊十五錢六冊八十五錢) 每月三日一回發行(錢十二冊一圓六十錢郵稅一圓)

落語(桂文治) 昔の詐偽(春風亭柳枝) 講談(東海白浪) 邑井(安永邪正)

動(松林伯知) 長篠戰記(伊東燕尾) 大阪陣(真龍齋貞水)

錄(放牛舎小桃林) 明治叛臣傳(松林伯圓) 外餘與數十篇

○本誌百花園は發刊毎に拍手喝采を以て歡迎せられ今や號數積て二百餘是れ一は本誌の趣味津々として益加はると同時に愛讀諸君の恩顧預つて大に力ありと謂はざる可んや聊か微意を表せん爲め今や大改良を施し本文は従前の倍數に増殖し每號高尚優美の口書を挿入し表紙は最も粹を盡し紙質印刷製本等鮮上加へ美中に美を加へんとす若し夫れ講談落語の更に精妙なるは本誌多年の特色として比類なし殊に本號所載の口書化競べ丑滿の鐘は珍の又珍奇の又奇なり其他あらゆる體裁の如何に新面目を施して顯れたるかは一讀の上には判せよ

婦學裏錦

一冊定價六錢 外 郵稅一錢を要す
 ◎第六拾號 明治三十年十月十五日發行
 (要目)
 紳士及び貴女の利の世界情の世界 舊約列女傳、軍司義男、傳警醒逸話(五)、松本高太郎、わがなしみ、濤庵、松月庵雜記、殘月、代子、瀨尾生器、白頭巾、まがき、わが面影、桔梗、いなづか、紅波、忍ぶ日記、ゆかり、荒磯、露葉、昔の夢、枯柳、失戀の詩、枯柳、去年の秋、蒲柳子、鬼念佛、露葉、白藏集、露葉選、秋の色、文狂郎、形見の教へ草、白雪

發行所

東京神田駿臺北甲賀町十三番地

尙綱社

青葉集

全一冊

正價參拾五錢 郵稅不用 十一月八日發賣

國木田哲夫、石橋曉夢、佐々木信綱、大町桂月、河井醉茗、田山花袋、大塚楠猪子、武島羽衣、宮崎羊兒、河内魚ぬの、正岡子規、與謝野鐵幹、鹽井兩江、太田玉茗、宮崎湖諸子、桐生悠々、

以上諸先生の錦心鏘勝より溢れ出てなる精金珠玉詩篇、試に繙き來らば青葉とよくる畔、詩神の出現に逢ふか如き感あらむ。西方の雜客幸に一本を贖ひ清興を賞玩せられ心事を祈る

發行所

本都元富士町二番地

文盛堂

五

英獨詩文研鑽

第 貳 編

口 繪

九月一日發行

- (1) トーマス、カーライル肖像
- (2) テルソン 西班牙人ト争闘ノ圖
- (3) ロルフ、ウオルド、エマルソン肖像
- (4) ベンジャミン、フランクリン肖像
- (5) 天下有名ナル西班牙闘牛ノ圖
- (6) アルフレッド、テニソン肖像

隔月一回一日發兌

目 次

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> (1) バイロン作
チャイルト、ハロルド、
(承前) (2) デニソン作
ゼー、バツシンク、テア、
アーサ(完) (3) エマルソン著
獨立獨行論(承前) (4) グレー作
春の感懷(完結) (5) ダーウキン作
機器を詠す(完結) (6) ケーマル作
虹に與ふ(完結) (7) ローデル作
蝶に與ふ(完結) | <ul style="list-style-type: none"> (8) カモエン傑作(葡人
大詩人) 岬の神靈ア
ダマストル(完結) (9) カーライル作
サルトル、リザルト
ニ(第一章) (10) シルレル作(英譯)
鐘の詩(完結) (11) サウゼー著
テルソン傳(承前) (12) フランクリン傳
(第一章)
ゲーテ作
ヘルマンドロテーア
(承前) (13) シルレル作(第一編)
鐘の詩 |
|--|--|

郵税無料 正 價 金 五 拾 錢 郵券一割増
 半ケ年三冊代金一圓貳拾錢(二割引) 一ケ年六冊代金
 二圓十錢(三割引) 東京神田一ツ橋郵便取次所宛
發行所 神田區南神保町拾番地 **關 貢 米**

新 体 詩

肖像眞跡挿入 正價金四十五錢
 全 一 冊 特別舶來上等紙
 四百ページ以上。

本篇收むる處、宮崎湖處子君の郷語、國木田哲夫君の獨歩吟、田山花袋君のつかね緒、愚仙堂主人の仙堂曉夢、重松朋水君の梢の雫、松岡國男君の野邊の露草、正岡子規君閑水、碧巖の大町桂月君の山村水郭、繁野大來君の鳥聲兩語集。太田玉茗君の花がたみを以てし、長短の新体詩通計數百篇の多さに及ぶ。猶詳細は本月十五日發行の當日に當り普く新聞紙上に廣告すべし。江湖諸君諒之焉

下谷區茅町二丁目壹番地

發 行 所 三 友 社

神田區裏神保町壹番地

發 賣 所 增 子 屋

中央會堂慈善音樂會廣告

陸軍々樂隊(二回)音學學校生徒(二回)ケール博士のピアノ獨彈。ガルスト夫人、及コ
ーツ君の獨吟、マクチャ君のオートハープ獨彈奏。ペーソ夫人家族四人のバイオリン
合奏。ガンドレット君の大オルガン。荒木竹翁全古堂兩君の尺八。弓家熊介君の薩摩
琵琶(二回)町田杉勢連中の三曲、長原春田の社中の清樂合奏、杵屋。連中の長唄。新來
の樂器オカリナ合奏。(二回)

入場券	上等	金一圓
	中等	金五十錢
	並等	金三十錢

(學生半額)

右の役割に基き、本月二十三日新嘗祭を期し午後六時より當會堂に於て音樂會を催會
致し候間、大に慈善家諸君の來聽を希願仕候、追て執行順序確定の上、新聞紙上にて御
披露可致候以上

明治三十年十一月

本郷春木町二丁目二十三番地

中央會堂

明治三十年十一月六日印刷

明治三十年十一月七日發行

發行兼印刷人

牛込區矢來町三番地字山里百〇四號
宮崎美技男

編輯人

本郷區春木町二丁目二十三番地
石橋哲次郎

發行所

牛込區矢來町三番地字山里百〇四號
三友社

印刷所

本郷區湯島切通坂町五十一番
建昇堂活版所

大賣所

神田區、	東京堂	京橋區、	文海堂	芝區、	栗原雜誌店
神田區、	増子堂	京橋區、	東海堂	牛込區、	盛文堂
本郷區、	田中屋	京橋區、	北隆館	日本橋區、	大倉書店